

教育経済常任委員会

平成25年4月4日 岡山県倉敷市

NPO法人岡山県木村式 自然栽培実行委員会を視察



高橋啓一理事長の説明

プロローグ

今回視察した、NPO法人岡山県木村式自然栽培実行委員会は、青森県弘前市の「奇跡のりんご」で知られる木村秋則氏の指導を受け、平成21年から自然栽培に取り組んでいる。

自然栽培とは、肥料も農薬も除草剤も使用せずに米や野菜を栽培する技術のことだ。当委員会は平成24年7月、石川県羽咋市でも木村秋則氏の指導による自然栽培を研修してきたが、今回は隣の岡山県でも取り組んでいるとの情報を得たので視察をした。

このNPOと連携している組織（人）は自然農法を実践している農

家、J A岡山中央会ほか4 J A、全農岡山パールライス、販売・加工業者、消費者で、J Aが全面的にバックアップしていることで流通の円滑化を図っている。J A岡山中央会の堀川会長は、「何百万年もかけてこんなすばらしい地球が作られたのに、ここ100年か200年でこの地球を無茶苦茶に汚している。もっと、食や環境について、こんな豊かな時代だからこそ考えるべきだ」とエールを送っている。

米の買取価格はNPO法人が定めるが、今年は1俵24000円にしたいと考えている。J Aも農家所得確保対策として取り組みに積極的で、自然栽培日

本一の県を目指している。



青空のもとでも熱心な説明会

J Aとのつながり

農業は契約栽培で、かつ自然栽培を目指すのであればならない。肥料を使わないことにより資源の枯渇を防ぎ、除草剤を使わないことにより環境を守り、休耕田を復活させることにより経済を発展させることができる。また、無駄に広範囲の流通を企図するとエネルギーや環境に悪影響を及ぼす。

（飯南町のJ Aの若い担当者や現場の職員は農家に利益を上げてほしいと望み、有機農法や自然農法に関心を持っているが、経済連や全農は肥料や農薬で儲けること

に興味があるように感じるが）

孫子の兵法に「最大の敵を味方につけよ」というのが在る。J Aは米1俵あたり10000円の手数料が入る。除草剤は10%の儲けだ。このNPOは、1俵20000円の手数料を保証して全量J Aが扱うようにした。これにより、J Aのような組織を作らずに米の流通ができた。

消費者の会員は県内で300人、大阪で400人くらいあり、入金50000円、年会費50000円だが、米の評判は上々だ。

桃を笠岡市で作りはじめて2年になる。この桃は市場で2kgが12000円で取引されている。小売価格は1個当たり4000円になるが、市場はもっと高く売れると言っている。このように付加価値がどんどん上がっている。J Aにとってもチャンスだと思っ

ている。従来米の価格は色、形、重量で決まっていたが、消費者が求めているのは安心安全と味だ。

J Aの買い取り基準には安全安心や食味は入っていないので、いくら良いもの、消費者が求めているものを作っても価格に反映されることが無い。

流通の考え方
もうすぐ木村秋則氏をモデルにした映画「奇跡のりんご」が全国300の映画館で上映される。これを契機に自然農法による農産物がブレイクすると思う。

当地以外で、全国には県市レベルで自然農法に取り組んでいるのは石川県羽咋市と滋賀県米原市だが、自然農法の米は作付けまでに売っておかなければだめだと考えている。市場に出しては意味が無い、生産に見合う消費者を確保した上で作付けに取り掛かるべきだ。

自然栽培は徐々に取り組んだのでは成功しない。たとえば少しづ

つ肥料や農薬を減らしていても収量が減るだけだが、全部やめたとたん収量が確保できるようになる。自然栽培では今までの常識は通用しない。

江戸時代には金を払わなければ品物は渡さなかったが、いつの頃からか商品を渡してから金をもらうようになった。そもそもこれが商品の価値を下げる元になっている。本当にいいものは先にお金をもらえり、いいものさえ作っておけば消費者は求めにやってくるものだ。

流通は市場原理に任せると、豊作になれば農家の手取りが減り、少なくて取れば消費者が困る。市

場は売って喜び、買って喜ぶとはならないものだ。需要が伸びている間はそれでも何とかなってきたが、消費の減少で市場経済が成り立たなくなった。お互いに良い方法を考えれば、農業の場合は契約生産しか考えられない。だから消費者と生産者とそれを結びつける人の3者が必要になる。その間にJ Aとユーザーが入るというシステムが変わっていく必要があると考えている。

今の米の流通は低価格の米にのみ残されていくと考えている。これからは二極化していくに違いない。

たとえば、最初、50人の消費者を集め、50俵の米が必要として、作付けに取り掛かる。これを繰り返して

ながら拡大していくことが私の仕事だと思っている。消費者には1年間この米を食べ続けてもらうことが必要だ。そのためには生産者の顔の見える関係を作らなければならない。

将来の夢

消費者の会員を募っているが、特典があるわけではない、日本の将来のために投資をするつもりで、会員になってほしいと言っている。田んぼの中のレンゲが満開になったら、消費者との交流会を企画する。堀川J A中央会会長は観光バスで消費者がレンゲを見にやってくる様にしたと言っている。木村秋則氏の農園には年間1万人もの観光客が訪れるそうだが、ここも世界から観光客が来る場所になりたいと思っ

感想

飯南町では炭素循環農法（自然農法）と小祝農法（有機農法）の研修が行われている。参加者は徐々に増加しているが実践には至っていない。

松江道の開通により国道54号の交通量減少が顕著になってきたが、直売所への影響が心配される。特徴のある農産品づくりに取り組み、攻める農業への転換こそ生き残る手段と確信し、自然農法や有機農法へ早急に取り組むべきと感じた。



理事長宅でも続く説明会



交流会が予定されるレンゲ畑